

構成的グループエンカウンターによるふれあい体験と学級づくり

——個と集団を育てる短期的・長期的計画とは——

林 環実・木谷 岐子

抄録：本研究は、児童の学校生活を短期間・長期間でみた場合のSGE実施計画の立て方を考察し、SGEを学級づくりに、より意図的・計画的に取り入れる方法を明らかにすることを目的とする。本研究では、学級づくりにSGEを取り入れることの有効性や基本的な行い方、配慮事項などを明確にするために、SGE実践に関する論文や児童向けに開発されたエクササイズについての先行研究を整理した。また、今日の教育現場ではSGEがどのような場面で実践され、学級づくりに生かされているのかを知るため、札幌市内の小学校に勤務する現役小学校教諭を対象として、自由記述式のアンケート調査を行った。その結果、様々な種類があるSGEのエクササイズの特徴を理解し、時期ごとの児童の実態に応じて適切に組み合わせて実施し、SGEでのふれあいを学校生活の一部として継続することで、それぞれの児童がお互いについて知り合い、その中で生まれた小さな仲間の輪を、学級全体に広げていくプロセスが重要であるとの結論に至った。

キーワード：小学校、学級づくり、構成的グループエンカウンター、エクササイズ、ふれあい

1. はじめに

文部科学省（2020）が示した「令和元年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」によると、近年、小学校におけるいじめの認知件数や不登校児童数はともに増加傾向にある。いじめや不登校の問題は、学校生活への不適応や不安感などの個の要因と、児童間での好ましい人間関係の形成がされていないことなどによる集団の要因が複雑に絡み合っているものと考えられる。教育現場では、これらの問題の未然防止や適切な支援の充実などの対応が大きな課題となっている。

筆者は学級という集団を見直し、児童全員が対等に意見を交流し合ったり、気軽に心を通わせたりすることができる雰囲気をつくることで、学校生活の支えとなる児童同士の人間関係を育てていくことにつながると考える。また、そのための学級づくりの一つの手立てとして、構成的グループエンカウンター（Structured Group Encounter：以下SGEとする）を取り入れることが効果的であると考ええる。「構成的グループ」とは、目的や活動内容、方法に合わせて人数、性別、持ち時間などの条件を設定することによって「意図的に枠組みされた集団」のことである（國分・國分、2018：76）。エンカウンターとは、リーダー（担任）が与えたエクササイズ（課題）とシェアリング（気づいたこと、感じたことの交流）を行うことを通して「メンバーがお互いに心を開いて本音でふれあう集団体験」をすることである（山中、2001：83）。エクササイズには300以上の種類があり、児童生徒の発達段階にあったものも数多く開発されている（國分・岡田、2015）。また、SGEの第一人者である國分（2018：110）は「学校教育へのSGE導入は、①リレーション、②キャリア教育、③学業の三つにメリットがある」と述べている。筆者はこの中の一つであるリレーションへのメリットに注目し、学級づくり

としてのSGEによるふれあい体験が、児童一人ひとり（個）に自己受容感や安心感を与え、仲間と心と心で交流したいと感じることが出来る好ましい人間関係（集団）を育てていくことが期待できると考える。

山中（2001：88）はSGEを活用した学級経営を行う場合「年間計画の作成などの見通しをもった取り組み」をすることが課題であると述べている。また、鬼海（2015：217）は「単発でない、一年を通して意図的、計画的、継続的に協力しあう活動を行うことが課題となる」と述べている。これらことから、本研究では今日の教育現場で行われているSGEの実践についてその方法や内容、それにより見られた効果等を調査し、一日、一学期、一年などの短期間・長期間でのSGE実施計画の立て方を考察し、SGEを学級づくりにより意図的・計画的に取り入れる方法を明らかにする。

2. 研究方法

学級づくりにSGEを取り入れることの有効性や基本的な行い方、配慮事項などを明確にするために、小学校でのSGE実践に関する論文や児童向けに開発されたエクササイズについて示された先行研究を整理する。また、札幌市内の小学校でアンケート調査を行い、今日の教育現場で行われているSGEの実践について、方法や内容、効果、期間、頻度などの各項目に沿って整理し、SGE実施計画について検討する。

3. SGEと学級づくり

3.1 学級でのSGEの行い方と留意事項

國分・國分（2018）はSGEの行い方には手順があると述べている。それはインストラクション、デモンストレーション、エクササイズの展開とインターベンション、シェアリングの四つである。インストラクションとは、これから行うエクササイズについて名称やねらいなどを簡単に説明・指示し、児童のエクササイズへの興味・関心を高めたり、どんなことを感じ取って欲しいかということ意識させたりするために行うものである。デモンストレーションとは、教師がエクササイズを体験したときの感情を伝えたり、エクササイズを試しにやってみせたりすることで、児童の意欲を高めていくものである。エクササイズの展開の中で、教師はグループを回って援助を行ったり、ルールが守られているかの確認をしたりし、必要に応じて介入をする。また、「エクササイズ実施」の際には、児童の様子を「記録」したり、「場合によっては教師も参加」したりするとよいと述べている。シェアリングでは教師が児童の活動の様子から感じ取ったことを全体へ共有したり、次回につながるような言葉がけを行ったりし、楽しく終えることができるよう留意する必要がある。シェアリングには「四つの功德」がある。一つ目は、「自分の内界を他者が受け入れてくれた、わかってくれたという非受容感が自己肯定感を育てること」である。二つ目は、「人前で自己が語れた自分」への「肯定感」であり、「すなわち、グループの中に自分の居場所を自分でつくれたという自己肯定感」である。三つ目は、「他者の自己開示に揺さぶられ、自分も自己開示できるようになる」ことである。四つ目は、「他者の自己開示にふれ、自分・他者・人生一般への認識が変わる」ことである。これらのシェアリングがもたらす効果をみてもわかるように、SGEにおいてシェアリングは欠かすことのできない非常に重要な活動の一つであるといえる。しかし、学級でSGEを活用する際には、ホームルームの時間や授業の隙間時間などシェアリングをするための十分な時間を確保することができない場合も考えられる。そ

ここで、ふりかえりカードへの記入やグループ・学級内での話し合い、発表など様々な方法を場面に応じて使い分けるよう工夫することも必要である。

3.2 学級づくりにSGEを取り入れることの有効性

筆者は、学級づくりにSGEを活用し、児童同士がエクササイズを通して様々な形で「ふれあい」体験をする機会をつくることで、学級の児童全員が自己受容感や安心感をもちながら学校生活送ったり、仲間と心と心で交流したいと感じることができる、好ましい人間関係を育んだりしていくことにつながっていくのではないかと考えている。

では、このように考える根拠は一体何なのか。まず、SGEにおいて「ふれあい」という言葉が指す意味について、國分・國分（2018：2）は「SGEの思想宣言」の中で、「あるがままの自分に気づき、それを他者にオープンにする。それを受けて他者も自分の内界をオープンにする。そしてお互いの世界を共有する。この心的状況を「ふれあい」または「エンカウンター」という。」と述べている。SGEではねらいに応じたエクササイズとシェアリングを行うが、それらの活動を通して児童は今まで気付いていなかった自分の思いや姿を発見し、お互いに自己表現をし合い、共感し合ったり自分とは違う他者という存在を知ったりする。こうした体験を繰り返していくうちに、児童は他者と心を通わせることのよさや喜びを感じられるようになり、同時に自己理解・他者理解をしながら、学級の仲間に対して思いやりの気持ちをもつことやお互いを尊重し合うことの大切さを学んでいくことができるのではないだろうか。

そして、國分・國分（2018：110）は「SGE学校導入」の3つの「メリット」のうちの一つに、「リレーション」を挙げている。「リレーション」とは、関係やつながりということを意味しており、ここでは信頼関係・人間関係の構築のことであると理解している。また、「SGEは学級にふれあい文化（風土）をつくるので「安心して自己表現できる」「仲間は私をわかってくれている」「私は受け入れられている」という感じ」が育ち、「学級集団に自分の居場所があるという感じになれる」とも述べている。このことの理由として、「エクササイズを通して自分に内的世界があるように、人にもそれぞれの世界があることがわかってくると（自他理解）、他を排除・攻撃しなくてもお互いに居場所を確保できることが体験学習できるからである」ということを示している。

SGEを取り入れた学級活動を研究した鬼海（2015：217）は、「2回の授業実践という特定かつ短期的な場において、豊かな人間関係が形成された。また、実践を行う度に子どもたちが、コミュニケーションを図り他者と協力しあう姿が観察された。よって、協力しあう学級をつくる上でSGEを活用することは効果的だと言える」と述べている。また、「子どもたちが協力しあうようになった要因」として、「SGEの活動が日常にはない非日常的な場であった」からであると述べている。

これらのことを根拠に、筆者は、SGEでは普段の学級での活動とは違ったゲームのようなワクワク感を味わいながら、エクササイズの課題の達成に向けて児童同士が新しい仲間関係の中でのコミュニケーションを自然にとり合うことができるため、徐々に心がほぐれて学級全体に温かいふれあいが広がっていくのではないかと考え、SGEを学級づくりに取り入れることが有効であると考えている。

3.3 エクササイズの種類と効果による分類

SGEのエクササイズには300以上の種類がある。そして、それらにはそれぞれねらいがあり、

SGE を実施する際には行う場面や児童のレディネス（知識や経験など）、目的等に合わせて選択することになる。また、エクササイズは五つの大まかなねらいで分類することができる（國分・岡田，2015）。五つのねらいとねらいごとのエクササイズの例は以下の表 1 に示す。

表 1 エクササイズのねらいと例

ねらい（エクササイズの例）：エクササイズの目的
自己理解（いいとこさがし）：友達よさを見つけてほめてあげる。友達が見つけた自分のよさを知り、受け入れられることの喜びを味わう。
他者理解（ジャンケン列車）：学級の中で、友達や教師とのリレーションを深める。みんなで遊ぶことを通して、楽しい学級イメージをもつ。ジャンケンをする前に「こんにちは」と挨拶をしたり、握手をしたりするなどのアレンジをすることができる。
自己受容（パチパチカード）：自分がかんばったことやしたことを友達に受け入れてもらい、成就感をもつ。日常活動として位置づけ、子どもたちがいいところを見つけたらすぐにカードを渡す自主的な活動にするなどのアレンジをすることができる。
信頼体験（聖徳太子ゲーム）：一人ではできないことも、何人かで協力すればできる、ということを経験しながら新しい人間関係をつくる。
感受性の促進（共同絵画／無言チームワークゲーム）：一人ひとりが自分の役割を遂行し、協力して一枚の絵を完成させる。言葉を使わずに、相手の気持ちを察する経験をさせる。

4. 今日の教育現場で行われている SGE の実践

4.1 調査方法

今日の教育現場では SGE がどのような場面で実践され、どのように学級づくりに生かされているのかを知るため、現役小学校教諭を対象としたアンケート調査を行った。研究の目的と方法、個人情報の取り扱い等について説明を行い、学校長から調査の許可が得られた小学校 1 校に協力を依頼した。2021 年 10 月に、担任の経験がある教員全員に調査票を配布した。その際、協力は自由な意思に基づいて決定するよう依頼した。調査協力者は 12 名であった。調査では自由記述形式の調査票を用い、これまでに担任をもった学級での SGE の実践について「行った時期や教科・行事名」、「学年」、「期間・頻度」、「エクササイズの内容とねらい」、「児童の様子や感じられた効果」の 5 つの項目への回答を依頼した。また、回答の際の留意事項として、SGE の実践だけに限らず、対人関係ゲームやアイスブレイクのワークなどの実践も含めて良いことを記載した。なお、児童の学校生活を、「朝の会や帰りの会などのホームルームの時間」、「各教科の授業の時間」、「学級活動や学校行事等の特別活動の時間」、「長期休暇の初めや終わり、学期などの区切りの時期」、「学級開きの際や学年の終わり」の五つの場面に分けて記載するよう依頼した。

4.2 調査結果と考察

アンケート調査から得られた、現場の教師が行っているエクササイズを、児童の学校生活の五つの

場面ごとに分け、さらに、國分・岡田（2015）が示した「エクササイズのねらい」と照らして分類、整理したものを示す。

4.2.1 朝の会や帰りの会などのホームルームの時間

調査結果を表2に示す。

表2 「朝の会や帰りの会などのホームルームの時間」のエクササイズ

感受性の促進	<p>㉔学期はじめや空いた時間に年数回、じゃんけんを勝った人から帰ることができるという活動を行っている。児童の様子や感じられた効果には、ゲーム性をもたせてさようならができることや、出口が混まないことが挙げられる。実施学年は1～6年生までの全学年である。</p> <p>㉕四月から秋頃までの期間に、小さな楽しみをつくることをねらいとして、東大ナゾトレなどのクイズを朝の会で一問程度行った。児童からは楽しんでいる様子が見られた。実施学年は1～6年生までの全学年である。</p> <p>㉖毎日継続して、帰りの会のあいさつの後にじゃんけんを行い、勝った児童から下校することができるという活動を行っている。日々の楽しみやルーティンとしたり、素早く下校したりすることをねらいとして行っており、児童にとってちょっとした楽しみとなっている。実施学年は1年生である。</p>
自己受容	<p>㉗一年間、毎日継続して、帰りの会で「〇〇タイム」という時間を設け、児童がお互いのよいところなどを伝えられるようにしている。感じられた効果として、自分が気付いていなかった自分のよさを知ることができたり、友達や先生に自分のよさを認められたりすることで、どの児童も笑顔になっていることが挙げられる。実施学年は3年生である。</p> <p>㉘毎日継続して、帰りの会で「今日のきりり」という活動を行い、一日の中でがんばっていた人を見つける時間を設けている。名前が挙がるとその児童に笑顔が見られ、掃除を細かいところまでがんばるなど、次の日もがんばろうとする姿が見られた。実施学年は3年生である。</p> <p>㉙前期から後期まで通年で、毎日継続して、帰りの会で日直が友達のよいところやがんばっていたところを発表する時間をつくっている。また、後期からは先生の視点で見つけた児童のよさも伝えるようにする。感じられた効果として、少しずつ視野が広がっていくことが挙げられる。実施学年は3年生である。</p> <p>㉚毎日継続して、帰りの会で友達のよいところや、その日のがんばりを伝え合う活動を行っている。児童の様子からは、自己肯定感の高まりや児童同士のつながりの強まりが見られた。実施学年は1～6年生までの全学年である。</p>

この調査結果から「朝の会や帰りの会などのホームルームの時間」に実施されている活動は、大きく分けて二つのグループに分けられると考える。一つは調査結果㉔～㉖の、じゃんけんやクイズなどゲーム性が強く、児童のちょっとした楽しみとなるような活動である。これは、本論「3.3 エクササイズの種類とその分類」で示す「エクササイズのねらい」のうち、「感受性の促進」に該当すると考える。日々の学校生活の中で、学級の仲間と共に楽しむことができる活動を設定することによって、明るく温かな雰囲気をつくることができ、一体感のある学級づくりにもつながっていくのではないかと考える。もう一つは調査結果㉗～㉚の、一日の中で見つけた仲間のよいところやがんばっていたところなどを伝え合う活動である。これは、本論「3.3 エクササイズの種類とその分類」で示す「エクササイズ

のねらい」のうち、「自己受容」に該当すると考える。これらの活動には、友達の一日のがんばりやよさなどを学級の児童同士で伝え合うことで、自分では気付いていなかった自分のよさに気付くことができたり、さりげない自分の行動が「人の役に立っていた」「見てもらえていた」ということを知ったりすることができる効果があると考えられる。また、帰りの会にこの活動を行うことによって、次の日もがんばろうとする気持ちや、明日も学校に行きたいと思う期待感をもたせることができるのではないか。

4.2.2 各教科の授業の時間のエクササイズ

調査結果を表3に示す。

表3 「各教科の授業の時間」のエクササイズ

信頼体験	<p>㉑年に1～2回、国語の時間に「いつ、どこで、誰が、何をしたゲーム」を行っている。4～5項目をそれぞれ分担して言葉をつくり、つなげて発表する活動を通して、みんなで何かをつくる楽しさを味わうことができたり、話すきっかけをつくることができたりする。実施学年は1～6年生までの全学年である。</p>
感受性の促進	<p>㉒授業時間が余ったときに、じゃんけん大会や「船長さんの命令」などのちょっとしたゲームやクイズなどを行っている。集中して学習することで、隙間時間に楽しい活動ができるという点がプラスの価値付けとなった。実施学年は1～6年生までの全学年である。</p> <p>㉓1ヶ月間、週に1回の頻度で、みんなで楽しむことをねらいとして「知っている漢字挙げゲーム」を行った。提示された部首の漢字を30秒間で黒板にできるだけたくさん書くゲームである。児童2名ずつで行い、それを3回繰り返す。児童にちょっとした楽しみをつくることができる。実施学年は3年生である。</p>
自己理解	<p>㉔四月の道徳の授業で、「よろしくギフト」という活動を行った。自分が友達にできることやこれまでにしたことをギフトという形でカードに書いて伝える活動を通して、新しい仲間自分のことを知ってもらったり、友達のことを知ったりすることをねらいとしている。「自分が友達にできることなんてない」と考える児童が多かったが、活動の中でお互いに優しくしてもらった経験を伝え合うことで、自分の何気ない行動も友達の役に立つことに気付き、自分の存在価値を感じている様子が見られた。実施学年は3年生である。</p> <p>㉕一学期末の道徳の授業で、じゃんけんをして勝った児童が、負けた児童に自分のよいところを書いてもらう「褒め褒めゲーム」を行った。学級で自由に交流して、たくさんよいところを書いてもらうことで自己肯定感を高めたり、仲を深めたりすることができる。実施学年は4年生である。</p>

この調査結果から「各教科の授業の際」に実施されている活動は、大きく分けて三つのグループに分けられると考える。一つ目は調査結果㉑の、学級の仲間と一緒に1つの文章をつくる活動である。これは、本論「3.3 エクササイズの種類とその分類」で示す「エクササイズのねらい」のうち、「信頼体験」に該当すると考える。共同作業をしながら学級のみんなで楽しい時間をつくり、同時に学習を進めていくことで仲間と協力して何かに取り組むことのよさを感じることができ、望ましい人間関係を築くためのきっかけとなるのではないか。二つ目は調査結果㉒～㉓の、活動である。これは、本論「3.3 エクササイズの種類とその分類」で示す「エクササイズのねらい」のうち、「感受性の促進」

に該当すると考える。授業の導入や隙間時間にちょっとした楽しみをつくることができ、学級全体の学習への意欲も高まっていくことが考えられる。三つ目は調査結果④～⑥の、活動である。これは、本論「3.3 エクササイズの種類とその分類」で示す「エクササイズのねらい」のうち、「自己理解」に該当すると考える。調査結果④～⑥はどちらも道徳科の授業で行われた活動である。これらの活動では、学級の仲間からこれまでに自分がしてきた行動のよいと思ったところを伝えてもらったり、他者から見た自分のよさを知ったりすることで、自分を見つめ直す機会となる。また、お互いのよさを学級全体で共有することができるため、皆に認めてもらえたという気持ちや自己肯定感、自己受容感を高めていくことにもつながっていくのではないかと考える。

4.2.3 学級活動や学校行事等の特別活動の時間のエクササイズ

調査結果を表4に示す。

表4 「学級活動や学校行事等の特別活動の時間」のエクササイズ

他者理解	<p>④転入生が来たときに、学級活動でアイスブレイクのワークを行った。緊張が緩み、転入児童が親しみやすくなる効果があった。実施学年は3～4年生である。</p> <p>⑥年度はじめの学級活動の時間に、「自分のことを知ってもらおう」や「私の秘密を一つ教えます」という活動を行った。また、持ち上がりの学級の場合には他己紹介を行った。これらの活動を通して、お互いや自分のことを知ることができ、児童同士の仲を深める効果がある。実施学年は1～6年生までの全学年である。</p>
感受性の促進	<p>③年に1～2回、学級活動の時間にChrome bookを使った絵しりとりや、「お皿ゲーム」を行っている。「お皿ゲーム」とは、グループで順に手を重ね、担任の「ガシャン」の合図で一番上の児童が手を下ろすゲームである。これらの活動を通して、グループ内でのコミュニケーションを図ることができる。実施学年は1～6年生までの全学年である。</p> <p>④2学期の学級活動の時間に「誕生日当てゲーム」を行った。ジェスチャーなどを使って誕生日順に並ぶ活動を通して、言葉を交わさなくても相手と通じ合うことができることを確かめる。効果としては、落ち着きのないときなどに行うと、静かにすることを意識できるようになることが挙げられる。実施学年は1年生である。</p>

この調査結果から「学級活動や学校行事等の特別活動の時間」に実施されている活動は、大きく分けて二つのグループに分けられると考える。一つは調査結果③～④の、転入生が来たり新しい仲間と出会ったりした際に、アイスブレイクの要素を含めて行われる仲間について知る活動である。これは、本論「3.3 エクササイズの種類とその分類」で示す「エクササイズのねらい」のうち、「他者理解」に該当すると考える。転入によって新しい仲間と出会ったり、クラス替えや進級後に初めて学級の仲間と集まったりするときにはどの児童も多少の緊張感をもつものである。そんなときに、ゲーム性のあるエクササイズを取り入れた活動を行いながら、他者と交流をすることで自然と緊張感が緩み、学級全体で仲を深めたりお互いについて知り合ったりするよい雰囲気づくりにつながっていくのではないかと考える。もう一つは調査結果⑤～⑥の、比較的多い人数で行うことができるゲームを行ったり、言葉以外の伝え合う手段として絵やジェスチャーを使ったりし仲間とのコミュニケーションを図る活動である。これは、本論「3.3 エクササイズの種類とその分類」で示す「エクササイズのねらい」のうち、「感

受性の促進」に該当すると考える。これらの活動では、ジェスチャーや絵のみで表現をすることによって相手の伝えようとしていることにより関心をもって交流をすることができ、考えや気持ちを察する力を育てていくことができるのではないかと考える。

4.2.4 長期休暇の初めや終わり、学期などの区切りの時期のエクササイズ

調査結果を表5に示す。

表5 「長期休暇の初めや終わり、学期などの区切りの時期」のエクササイズ

- | |
|---|
| <p>㉑年に2～3回、学期の初日に「夏休み思い出ビンゴ」などを行っている。それぞれでキーワードを書いて、一人ずつその思い出を発表する。出したキーワードでビンゴを進めることで、ただ思い出を聞くよりも興味関心をもつことができている。実施学年1～6年生までの全学年である。</p> <p>㉒七月や十二月など各学期の終わり頃に、1時間～2時間の授業時間で、学年・学級づくりをねらいとして児童が企画した遊びや出しものなどを行っている。児童は、自分たちで楽しい時間をつくることよきや難しさを体験して、反省を次の取り組みに生かそうとしていた。実施学年は1～6年生までの全学年である。</p> <p>㉓長期休暇前の学級活動の時間に、いろいろなゲームをし、ふりかえりを行っている。明るい雰囲気や学期の締め括りをする事ができ、みんなで協力できたことなど学級や自分自身の成長を確かめたりする時間となる。実施学年は3年生である。</p> <p>㉔それぞれの学期の長期休暇前に1回、みんなで楽しむことをねらいとして、フルーツバスケットやリーダー探し、イスとりゲームなどを行っている。児童からは楽しんでいる様子が見られ、学級の絆を深める効果がある。実施学年は1～4年生である。</p> <p>㉕長期休暇前に、年に2回程度、「お楽しみ会」として、なんでもバスケットやリーダー探し、伝言ゲーム、絵しりとりなどを行っている。明るい気持ちで長期休暇を迎えたり、児童同士の仲を深めたりする効果がある。実施学年は1～6年生までの全学年である。</p> |
|---|

「長期休暇の初めや終わり、学期などの区切りの時期」のエクササイズは、それぞれの活動自体がお楽しみ会のレクリエーションの一つとなっている場合が多く、本論「3.3 エクササイズの種類とその分類」で示す「エクササイズのねらい」と重ね合わせて考察することができなかった。筆者はこのような調査結果となった要因として、学校生活の1)～3)の場面とは異なり、4)の場面が一年間の中の節目となる場面であるということが関係していると考えられる。長期休暇や学期で区切られる時期に、それまでのまとめとして様々な形で児童同士のふれあいのある活動を行うことによって、学級全体や児童一人ひとりの成長を感じることができるようSGEや対人関係ゲーム等が応用されているのではないかと考える。

4.2.5 学級開きの際や学年の終わりのエクササイズ

調査結果を表6に示す。

表6 「学級開きの際や学年の終わり」のエクササイズ

他者理解	<p>④年度はじめの学級活動の時間に、仲間づくりをねらいとして「人数集めゲーム」を行った。「人数集めゲーム」は、リーダーが手を叩いた回数と同じ人数で集まるというものである。「他クラス」や「男女」などの条件を付けて行うことで、いろいろな児童同士で知り合うことができるという効果がある。実施学年は1～6年生までの全学年である。</p> <p>⑤四月の学級開きの際に、自己紹介クイズを行った。楽しみながら自分のことを知ってもらえるという効果がある。実施学年は1～6年生までの全学年である。</p> <p>⑥四月の学級開きの際に、自分の好きなものをカードに書いて行う「自己紹介ビンゴ」をした。お互いのことや共通の好きなものを知ることができたり、場の雰囲気を盛り上げたりすることができる。実施学年は5年生である。</p>
自己受容	<p>④三学期末に、クラスのいろいろな出来事を交流して一年間をふりかえり、「～してくれてありがとう」とカードに書いて交換するという活動を行っている。お互いに思い出やありがとうという気持ちを交流することができ、自分のよさに気付いたり、仲良くなったりすることができる。実施学年は1～6年生までの全学年である。</p>
感受性の促進	<p>⑥学級開きの際、机の上に一人一文字ずつマグネット付きのカードを置いておき、全員で黒板に貼り付けることでメッセージが出てくるという活動を行った。新しい学級で、新しい仲間と共同作業をすることができ、仲間意識を芽生えさせるきっかけづくりとなった。実施学年は3年生である。</p> <p>①年度や学期のはじめにピラミッド型のビンゴゲーム「ピラミンゴ」を行った。笑いが起き、場の雰囲気がほぐれたり、普通のビンゴゲームと違うことに面白がったりしている児童の様子が見られた。実施学年は1～6年生までの全学年である。</p> <p>⑤学級開きの四月頃に一週間程度、児童同士の心を開きやすくすることをねらいとして、学級の仲間に話しかけたり手をつないだりするなどの接触を目標に設定していた。活動後は、自然に児童同士で話をするようになるという効果が見られた。</p>
信頼体験	<p>①三月や四月に、一人一枚カードを持ってみんなで並べ、一つの文をつくるというゲームを行った。お互いに話をしなければ進めて行くことができないため、会話が生まれる。話をするきっかけとしてはよいが、文をつくるに当たって一部の児童だけが進めてしまうという様子も見られたため、もう少し工夫が必要である。実施学年は3年生である。</p>

この調査結果から「⑤学級開きの際や学年の終わり」に実施されている活動は、大きく分けて四つのグループに分けられると考える。一つ目は調査結果④～⑥の、学級全体で仲間と会話をしながらゲームをしたり、お互いに自分のことを伝え合ったりしリレーションを深めていく活動である。これは、本論「3.3 エクササイズの種類とその分類」で示す「エクササイズのねらい」のうち、「他者理解」に該当すると考える。これらの活動には、グループ分けをするのではなく学級全体を一つのグループとして活動を進めていくことによって、普段はあまり交流をすることのない児童同士やはじめて出会った学級の仲間などの間で会話のきっかけをつくる効果があると考えられる。また、自己紹介という他者について知る活動を、ゲーム性をもたせて行うことによって、学級に楽しい雰囲気をつくることができるのではないかと。二つ目は調査結果①の、一年間の中で仲間にしてもらったことをお互いに感謝の気持ちとして伝え合う活動である。これは、本論「3.3 エクササイズの種類とその分類」で示す「エクササイズのねらい」のうち、「自己受容」に該当すると考える。この活動には、お互いの

よさを認め合う体験を通して、仲間から肯定的なメッセージを受け取ることで自己肯定感や自己受容感を育む効果があると考えられる。また、自分自身や仲間の一年間の成長や友達の小さな親切に気付くきっかけにもなり、他者理解にもつながる活動である。三つ目は調査結果⑥～⑧の、学級の児童全員でゲームや共同作業をしたり、会話や身体接触をしたりし交流を深めていく活動である。これは、本論「3.3 エクササイズの種類とその分類」で示す「エクササイズのねらい」のうち、「感受性の促進」に該当すると考える。年度はじめや学期のはじめに学級の児童全員で進められる活動を行ったり、直接的なふれあいのある活動を行ったりすることによって、みんなで仲を深めていきたいという気持ちを育てることにつながっていくのではないか。四つ目は調査結果⑨の、学級の仲間と会話をしながら一つのものをつくり上げていく活動である。これは、本論「3.3 エクササイズの種類とその分類」で示す「エクササイズのねらい」のうち、「信頼体験」に該当すると考える。この活動では、仲間に自分の考えを伝えたり、話し合いをしたりしながら一緒に何かをつくるという体験を通して、協力して取り組むからこそ味わうことができる楽しさや達成感に気づき、一つの学級としての仲間意識を育むことができると考えられる。

5. 総合考察

一日をひとまとまりとしてSGE実施計画を作成する場合には、児童が気持ちよく一日をスタートしたり、次の日からの学校生活に意欲や期待感をもったりするための手立てとなるようにし、短時間の活動でも児童一人ひとり（個）の日々の支えとなるような活動とねらいを定めることが望ましいと考える。調査結果「1) 朝の会や帰りの会などのホームルームの時間」では、児童にとってのちょっとした楽しみをつくるために行っているという点や、それによって児童の楽しんでいる姿や笑顔がみられたという点が、それぞれの事例と共通していることがわかった。このことから筆者は、表7に示す様に、効果的にSGEを活用し学級づくりに役立てていくには、毎日継続して実施するようにし、日々のルーティンとして位置づけるとよいと考察した。

表7 SGE 日間実施計画

機 時	エクササイズ	ねらい
朝の会	<ul style="list-style-type: none"> •スピーチタイム（楽しみなこと） •お絵かきクイズ •なぞなぞ 	<ul style="list-style-type: none"> •朝の会の活動として短い時間でできる交流やゲームを行うことで、明るい気持ちで一日をスタートさせられるようにする。
休み時間	<ul style="list-style-type: none"> •ジャンケン列車・団結くずし •何でもバスケット・カムオン •目かくしジョギング 	<ul style="list-style-type: none"> •休み時間の「全員遊び」で、いろいろな友達と集団で遊ぶことを通して、学級の中でのリレーションを深めたり、楽しい学級のイメージをもったりする。
帰りの会	<ul style="list-style-type: none"> •パチパチカード •今日の〇〇（MVPなど） 	<ul style="list-style-type: none"> •一日の中で自分ががんばったことやしたことを、仲間に認めてもらう活動を通して自己肯定感を高め、受容的な学級風土をつくる。

そして、一学期または一年を見通してSGE実施計画を作成する場合には、各学期に行われる学校行事の特徴や学期ごとの児童の実態に合ったエクササイズを取り入れるようにすることが望ましいと考える。また、仲間とのふれあい体験を積み重ねることで築いてきた温かな人間関係を、学校生活の節目節目に感じられるよう行い方を工夫する必要があると考える。

時期的な特徴や児童の様子に着目しながら、一学期または一年を見通してみると、学期を経るごとに学級の仲が深まっていき、学級づくりにおける目標も変化していくことがわかる。そのため、表8に示す様に、一学期または一年を見通してSGE実施計画を立てる場合には、様々なエクササイズを適切に組み合わせて計画していくことが大切なのである。

表8 SGE年間実施計画

学期	月	エクササイズ (具体的な時機)	ねらい
一学期 リレーションづくり	四月	<ul style="list-style-type: none"> あいさつゲーム (学級活動) 質問ジャンケン (学級活動) 団結くずし (学級活動・体育) 聖徳太子ゲーム (学級活動) 	<ul style="list-style-type: none"> リレーションづくりにつながる活動を通して、徐々に友人関係の輪を広げていく。 自分の居場所があると感じさせるために、学級の仲間全員で協力するゲーム等を行う。
	五月	<ul style="list-style-type: none"> 他己紹介 (学級活動) サッカージャンケン (学級活動) 	
	六月	<ul style="list-style-type: none"> カムオン (学級活動・体育) 	
	七月	<ul style="list-style-type: none"> 私はわたしよ (学級活動) 	
	八月	<ul style="list-style-type: none"> ほめあげ大会 (学級活動) あなたの〇〇が好きです 	
二学期 深める	九月	<ul style="list-style-type: none"> 四つの窓 (学級活動・道徳) 	考えを伝えあったり、直接的なふれあいをしたりする活動を通して、学級集団を確立する。
	十月	<ul style="list-style-type: none"> ブラインドウォーク (学級活動・体育) 	
	十一月	<ul style="list-style-type: none"> 共同絵画 (学級活動・図画工作) 	
	十二月	<ul style="list-style-type: none"> クリスマスツリー (学級活動・体育) 10年後の私 (学級活動・国語) 	
三学期 受容・気付き	一月	<ul style="list-style-type: none"> いいとこさがし (学級活動) 	<ul style="list-style-type: none"> 自己や仲間、学級のよさに気付かせ、自己肯定感・受容感をもちながら学年の締め括りを迎えることができるようにする。
	二月	<ul style="list-style-type: none"> 自分への手紙 (学級活動・国語) Xからの手紙 (学級活動・国語) 	
	三月	<ul style="list-style-type: none"> してあげたこと、してもらったこと (学級活動) 	
		<ul style="list-style-type: none"> ありがとうカード (学級活動) がんばり賞あげよっと 別れの花束 (学級活動) 	

本研究を通して筆者は児童間で好ましい人間関係を築き、温かく安心感のある学級集団を育てていくためには、SGEでのふれあい体験を学校生活の一部として継続していくことによって、児童一人ひとりがお互いについて知り合う中で生まれた小さな仲間の輪を、学級全体に広げていくというプロセスが重要であるとの結論に至った。筆者がSGEという概念に出会った当初は、数回きりのエクサ

サイズであっても学級づくりに良い影響を与えると考えていた。しかし、エクササイズの特異な環境において深まったかのようにみえた人間関係が必ずしも日常生活の中で定着していくとは限らない。また、学級の中には仲間との交流を深めたくてもなかなか勇気がでなかったり、仲間に伝えたい思いや気持ちを自ら表現することに苦手意識をもっていたりする児童がいることも考えられる。そのため、数ある SGE のエクササイズのそれぞれの特性と、時期ごとの学級づくりの進捗状況を照らし合わせて、教師が意図的・計画的に学級全体で交流をもつきっかけとなる場を設けることが必要不可欠と考える。

文献

- 鬼海康博, 2015, 「協力しあう学級づくり：構成的グループエンカウンターの実践を通して」『山形大学大学院教育実践研究科年報』6：214-217.
- 國分康孝・岡田弘, 2015, 『エンカウンターで学級が変わる グループ体験を生かした楽しい学級づくり 小学校編』 図書文化社.
- 國分康孝・國分久子, 2018, 『構成的グループエンカウンターの実践と方法 半世紀にわたる探究の成果と継承』 図書文化社.
- 文部科学省, 2020, 「令和元年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」『第 128 回初中分科会資料 1』 https://www.mext.go.jp/content/20221021-mxt_jidou02-100002753_2.pdf (アクセス日：2023 年 1 月 4 日)
- 山中佐喜男, 2001, 「構成的グループエンカウンターと学級経営：小学校低学年「きらきら学級」の実践を通して」『情緒障害教育研究紀要』20：83-88.

Contact Experience and Class Creation through Structured Group Encounters : What are short-term and long-term plans for developing individuals and groups?

HAYASHI Tamami and KIYA Michiko

Abstract: The purpose of this paper is to examine how to make a Structured Group Encounter (SGE) implementation plan when looking at children's school life in the short term and long term, and to clarify the method of intentionally and systematically incorporating SGE into the classroom. In this study, in order to clarify the effectiveness of incorporating SGE into class planning, basic methods, considerations, etc., we organized papers on SGE practice and literature on exercises developed for children. In addition, in order to find out in what situations SGE is being practiced in today's educational settings and how it is being utilized in class development, we conducted a free-text questionnaire targeting current elementary school teachers working in Sapporo City. We conducted a survey based on the results. This helped us to understand the characteristics of each of the many types of SGE exercises and combine them appropriately according to the actual situation of the children in each period and Continuing to interact with SGE as part of school life, we came to the conclusion that the process of expanding the small circle of friends that emerged as each child got to know each other with in the entire class was important.

Keyword: Elementary school, class building, Structured Group Encounter, exercise, contact